様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　5　月　31　日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2010～2011
課題番号：22820078
研究課題名（和文）　中国 1920 年代の小品文コラムと周作人にみる小品文発展の様相に関する初歩的研究
研究課題名（英文）　A fundamental analysis of the development of the ‘familiar essay’, focusing on articles from literature magazines of the 1920s and the work and ideas Zhou Zuoren(周作人).

研究代表者
鳥谷　まゆみ（TORIYA　Mayumi）
立命館大学・言語教育センター・講師
研究者番号：00580507

研究成果の概要（和文）：

本研究は、中国における近代化の波が 1920 年代の「小品文」概念形成に影響を与え、ひとつの運動を形作ったことを明らかにするものである。20 年代前半、夏丏尊を筆頭とする教育家集団は､作文教育の一環として小品文を提唱し自らも作品を手がけていた｡その小品文の概念は、日本小品文に取材したものである。これらの新資料からは 20 年代における「小品文運動」の存在が看取できる。本研究の成果が、従来の小品文研究に一石を投じることを期待する。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to elucidate one aspect of the familiar essay’: its development from the period following the peak of the May Fourth Movement to the height of the genre’s popularity in the 1930s.This research also introduces the work of Xia Mianzun(夏丏尊), who is often credited with the introduction of the familiar essay for composition education in junior high school. Here, it is argued that he in fact imported the concept of the familiar essay from Japan in the first half of 1920s.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	570,000	171,000	741,000
2011 年度	520,000	156,000	676,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,090,000	327,000	1,417,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：　各国文学・文学論
キーワード：中国文学、近代、小品文、周作人、1920 年代、散文、作文教育

１．研究開始当初の背景

近代に入り、戦争や文化大革命を経験した中国において、中華民国期における文芸雑誌の大半が散逸した。そのため、長年にわたり原物を閲覧することは困難であった。

それが､80 年代頃から徐々に収集されるようになり、近年限定的であるがそれらの閲覧

が可能となった。
　近代小品文に関する研究の大半が、30 年代に関するものである。つまり、「小品年」と称されるほどに流行した 30 年代半ばの小品文に関する先行研究は多いものの、20 年代に関する論考数は多くない。
　その理由は、おおよそ次のようなことが考えられる。
　1．20 年代初頭、文言から白話への移行が緩やかに行われており、言語そのものが安定していなかった、
2．１のため、文学ジャンルもまた未成熟な状態であった、
3．中国古典の明末に流行した「小品文」と同義のものとして捉えられた、
４．小品文の形式が短く、また、名作や有名作家と呼ばれる人物がいなかったことから、人々の関心が向きにくかった、
５．作品の多くが散逸してしまっており、閲覧が困難、
おおよそ以上のような理由が考えられる。
　次に、周作人ついて言えば、中国において彼が対日協力者「奸漢」とされたため、その研究は未だ発展途上の状態にある。
　日本では周作人と同時代の中国現代研究者らによって、その翻訳や作品分析がなされたが、本格的な研究は、木山英雄によって 70 年代頃から始められたと言える。
　いっぽう、大陸においては 90 年代初頭に『周作人日記』や評伝が相次いで出版されるようになり、これらの資料をもとに北京大学教授、銭理群によって本格的な研究がはじめられた。
　その後、今日も継続的に周作人研究はなされるようになったが、未発見の関連資料は少なくなく研究の余地はおおいに残されている。
　本研究は、こうした状況を受け、開始したものである。

２．研究の目的

　本研究は、近代中国における小品文発展の経緯について、その創始者とされる周作人の文芸思想を軸に、文芸雑誌上の評論を分析視点として取り入れ、これを調査し、近代中国における近代化の波が小品文概念の形成に与えた影響を考察することを目的とする。
　中国の詩文重視の伝統から言えば、小品文が持つ散文的気風を否定的に捉える見方には一定の妥当性がある。しかしその小品文が、政治的混乱を迎え閉塞感漂う 20 年代半ばの中国において、近代文化の一側面を形作ったその証左を、文芸雑誌にみる小品文像の変容から窺うことができる。小品文が同時代の中国の人々に与えた娯楽性や近代散文の発展に与えた影響は無視できない。

３．研究の方法

　本研究では、文芸雑誌上の評論を分析視点として取り入れた。雑誌上の小品文作品を調査、蒐集し、小品文の概念がどのような経過を経て形成されていったのかを分析する。
　分析結果をもとに、関連資料と周作人文章を比較することで、両者の相違と関係性を提示し、1920 年代から 30 年代に続く小品文発展の連続性を指摘する。

４．研究成果

　本研究は、近代中国における小品文の発展の経緯について、その創始者とされる周作人の文芸思想を軸に、1920 年代の文芸雑誌で掲載された小品文に関する評論およびコラムにみる文学ジャンル観を分析視点として取り入れることにより、中国における近代化の波が小品文の文学的概念の形成に与えた影響を明らかにすることを目的とする。
　平成22年度は主に次の研究を実施した。
　１．これまで蒐集した小品文関連の資料、論考の問題整理の実施、
２．１．の作業と並行して周作人の文芸評論の分析の実施と文芸雑誌の小品文評論および小品文欄の蒐集作業の実施、
３．蒐集した資料の分析の実施、
４．平成22年度後半以降に、研究成果について学会報告の実施。
　上記四点の実施に伴い、次のような研究の成果があった。
１．1925年頃の周作人小品文の変化を指摘するに至った、
２．新たに蒐集した小品文関連の資料から、20年代初頭における小品文の言及は、中国上虞市に存在した教育家集団である白馬湖派が、活発に行っていることがわかった、
３．シンポジウムや研究会で口頭報告を実施し広く意見を頂戴し、その内容を纏め発表した。（鳥谷まゆみ「一九二〇年代中国「小品文」に関する一考察－周作人『雨天的書』序文を中心に－」（『立命館言語文化研究』第22巻3号、2011年1月、169-184頁）。
　平成23年度は、前年度から継続して小品文関連資料の蒐集を行った。特に20年代初頭から後半までの評論や作品を中心に調査、蒐集のうえ分析を行った。具体的な研究の実施内容は次の通り。
　１．これまで蒐集した小品文関連資料や論考の問題整理の実施、
２．１の作業と並行して、周作人の評論のな

かでも主に20年代後半の小品文作品と小品文教育に尽力した白馬湖派に関する評論を中心に分析した、
３．新資料の調査、発掘を行った（北京市、上虞市）、
４．研究成果を学会や講演で報告し（日本現代中国学会、日本中国学会、孔子学院）、その内容をまとめ紀要や研究会誌『野草』に発表した。

本研究では、以上のような調査、分析の実施により、従来殆ど論じられることがなかった中国の1920年代全般を通した小品文発展の様相を明らかにした。

本研究の遂行によって、1930 年代の小品文ブームに先立つ 20 年代前半に、夏丏尊を筆頭とする教育家集団（白馬湖派）が、作文教育のなかで小品文を提唱し、彼ら自身も盛んに小品文を執筆していたことが判明した。その教育観に基づく「小品文」は 20 年代末、さらに 30 年代にも受け継がれるものである。

また、本研究において、日本小品文が近代中国の小品文に直接影響した証左となる日本文学資料（水野葉舟、『小品文練習法』1915）を発見した。このことにより、これまでの小品文研究に一石を投じることが出来るのではないかと思う。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①著書名：鳥谷　まゆみ、
論文表題：「一九二〇年代中国「小品文」に関する一考察―周作人『雨天的書』序文を中心に―」、
雑誌名：『立命館大学言語文化研究』、
査読：有、
巻：22巻3号、
発行年：2011年、
ページ：169－184

②著書名：鳥谷　まゆみ、
論文表題：「白馬湖派小品文と春暉中学の作文教育―夏丏尊主編『文章作法』にみる1920年代初頭の小品文を中心に―」、
雑誌名：『野草』、
査読：有、
巻：88号、
発行年：2011年、
ページ：35－58

〔学会発表〕（計 3 件）

①発表者名：鳥谷まゆみ、
発表表題：「1920 年代初頭における白馬湖派作家群の小品文」、
学会名：日本現代中国学会、
発表年月日：2011 年 6 月 4 日、
発表場所：摂南大学（大阪府）

②発表者名：鳥谷まゆみ、
発表表題：「夏丏尊における「小品文」提唱と日本 ―『文章作法』と水野葉舟『小品文練習法』の異同から―」、
学会名：日本中国学会、
発表年月日：2011 年 10 月 6 日、
発表場所：九州大学（福岡県）

③発表者名：鳥谷まゆみ、
発表表題：「1920 年代初頭の中国「小品文」と日本　―文学・教育・雑誌―」、
学会名等：立命館孔子学院中国理解講座、発表年月日：2011 年 11 月 26 日、
発表場所：立命館大学（京都府）

〔図書〕（計 1 件）

著者名：鳥谷まゆみ、
出版社名：東アジア学会、
書名：『東アジア―行き交う人・モノ・文化―』、
発行年：2012 年、169（担当ページ数）：93 - 112

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
www.ritsumei.ac.jp/acd/re/.../RitsIILCS_22.3pp169-184Toriya.pdf

６．研究組織

(1)研究代表者
鳥谷　まゆみ（TORIYA Mayumi）
立命館大学・言語教育センター・講師
研究者番号：00580507

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：